

Mrs. M の語ったシヨパン

長屋のり子

Mは輝く美しい頬をもつ女(ひと)

美しい胸と美しい脚をもつ女

果敢な潔い精神もつ女

五月三十日夕刻そのMから電話が掛かった。

私の海に向く部屋にはポリーニのシヨパンの「革命」が

流れていた。それにインスパイアーされてか、

「私、シヨパンが好きなの」Mの声がいきなり昂揚する。

以下はMのはつなつの昏れてゆく海の

さざ波に似た声が私に伝えた浸み入る迷懐…。

中学生の頃から学生時代はずっとジャズ一辺倒だった。

ローン・カーターのベース、

スタンゲッツのテナーサククス、

マルサリスのトランペット！

あの軽々としたジャズ！

即興演奏(インプロヴィゼーション)、

その場のひらめきが命の自由奔放なジャズメン！

私は、ジャズ喫茶に入りびたつた。

その後二十三才で結婚。夫の影響で知的で

構築的で斬新な音楽の方へ心が向くようになって…、

けれども三十二才で深刻な憂いによる離婚。

そのあとの六月、苦しい時期の苦しい夜、孤独な

私は朝里峠を、暗い夜道を横切つて、つん裂いて

身体を全身硬直させて、カペラで走つた。

自分の喘ぎが自分の耳底で響くほど苦しかった。

森は魔王の広げるところまでも不気味な大きな

黒いマントだった。霧が魔笛のようにふるえて

威嚇するように車に押しよせ、車を押し上げた。

恐怖に駆られて思わずカーステレオのポリウムを

マキシムにあげた。

その時に流れ出した曲がシヨパンだった。

「革命のエチュード」だった。

アルゲリッチだったか、リパッチイだったか、

いずれにしてもピアニストの指に翼が生えたような

鋭い凄打鍵だった。

音楽のもつあらゆるアスペクトが有機的に

叩き出されて私に迫つた。

あれは一瞬のうちに私が音楽と一体になる

奇蹟の瞬間だった。

シヨパンが力強い響きを立てて私を歓喜として襲つた。

満潮時の波の音だった。初夏の風に洗われた白い

高い波がうわつと立ち上がつて、まるごと私に

落ちてきた。海の塊がどさりと私に覆い被さつた。

まさに麻薬的なツイストで私をいきなり浄化した。

私の皮膚に「革命」がすべり込み

頬とこめかみにピリピリ電流が走つた。

私は朝里峠の頂上で車のすべての窓を開け放つた。

車の中に夜の透明がなだれ込んでそれを

胸いっぱい吸い込んで、私は涙がとまらなかつた。

私はいつまでもいつまでも声を上げて泣いた。

そうやって絶望の淵からシヨパンが私を救つたの。

シヨパンの「革命」の意識に私はびつたり重なつて、

身体の中に含まれ得る限りの。生の意欲が

もくもく疼き出したの。

ポジティブな生々とした感情を三十二才の私に

喚起させたの。

陰鬱な夜の森の空気さえその流れを変えた。

黒い不穏なマントが消えて、霧が消えて

私の苦痛が消えて、これから起こるだろうことへの

怖れも不安も、そして悔恨も全てが掻き消えていた。

高い音域のリズムの律動が始まると、

夜の森は音の向こう側のものまでひきよせて

甘やかな輝きをすらみせた。

私の心がやわらかになり、やさしく謙虚に

なつていくのが自分ではつきり感じられた。

対位法的にからみ合う、不具合な不幸な私の生の

流れをシヨパンの音楽が新鮮な息吹きとしてとめた。

私は音楽と暗黙の了解をした。夜眼に真白い

アカシアの深い森に向かつて開けた私の新しい道。

そのときからだわ、

あれからずっとシヨパンの静かな柔かなリズムの

うねりが私の意識の深部を打ちつづけている。

私はシヨパンと一緒に流れ溶けあっている。

あれから今日まで、私はそうやって生き、

明日からもきつとそうやって生きていく。

「私、シヨパンが好きなの」

シヨパンを聴いていると立ち上がってくる

エチュード「革命」の情景、そしてポロネーズ「英雄」

の情景、それが私を揺るがないものにする。

Mの声が紅潮して官能的に透きとおる。

眼下の石狩湾が夕陽に透かし出されて

冴え冴え燃え始める。

ほどなく七十才になるMの生きる意志が

冴え冴え燃えている。